

怪談「いぬ」

ボクは宅配のバイトをしている。
あの、猫のマークで有名なところだ。
そのせいではないだろうけど、不可思議な体験をすることが多い。
この話は、その中のひとつ。

ボクは届け物を抱えて、玄関の呼び鈴を押した。
そこは、犬塚さんの家。
初めて伺う家だった。
「は～い、どうぞ～」
ほどなく、中から女の人の声。
「こんにちは～。 運輸です～」
と、玄関内に入ると。
そこには判子をくわえた犬がいた。
ピンク色のエプロンをした、マルチーズだ。
他に人の姿はなかった。
「えーと...」
ボクが戸惑っていると、マルチーズは手招きするように首を振った。
ココに置いて、とでもいってるみたいだ。
ボクが届け物を置くと、マルチーズは受け取り票に判子を押しした。
相手が犬でなければ、フツのやりとりと変わりはない。
「あ、ありがとうございました...」
ボクはいつものように、頭を下げた。
犬にするのもヘンだけど、お客さんだからね。
それにしても、よく手懐けられてるなあ...。
ボクは感心しながら、犬塚さんの家を後にした。

別の日に再び、犬塚さんの家に届け物があった。
呼び鈴を押すと、
「はい。どうぞ」
中から、落ち着いた感じの男性の声。
玄関へ入ると、大きなセント・バーナードが判子をくわえてた。
正直、尻込みしちゃったけど、セント・バーナードはおとなしそうだった。
ボクはマルチーズの時と同じように、届け物を置いた。
セント・バーナードもマルチーズ同様、器用に受け取り票へ判子を押しした。
「ありがとうございました」
頭を下げてドアを出ると、立ち去り際に話し声が聞こえた。
「どうでした？」
「ふむ。なかなか、おもしろいものだな」
マルチーズの時の女の人と、さっき男性の声だった。

そしてまた別の日。
「は～い」

ちょっと奥まったところから、聞き覚えのある女の人の声が聞こえた。

「どうぞ～」

続けてそう聞こえたので、ボクがドアを開けると、ちょうど二匹の小犬が廊下を走って出てきた。

双子みたいなチワワの一方が、判子を口にくわえてた。

届け物を置いて、判子をもらい。

二匹のチワワは、ボクがドアを開ける前に、部屋の奥へと元気よく走って消えた。

そして奥から、

「おかーさんできたー」

って、はしゃぐ、子供の声…。

…って、ホントに犬の家族なのかつ？！

ボクは犬塚さんへの届け物が、だんだん楽しみになっていた。

マルチーズのお母さん。

セント・バーナードのお父さん。

チワワの双子の子供。

テリアのおばあさんがいることもわかった。

ホントに犬の家族なのかは別にして、“判子を押し”芸を見るのはとても楽しい。

今日はダレが出てくるんだろ？

ボクはワクワクした気持ちで、犬塚さん宅の呼び鈴を押した。

「おう。入れよ」

ぶっきらぼうな、若い男の声。

ドアを開けた玄関には、コワもてのボクサー犬がいた。

鎖なんかをぶら下げ、耳にピアスまでして、チャラチャラと飾りたててる。

まるでパンクロッカーだな…。

いきなり大きな声で吠えられ、ボクは飛び上がってしまった。

実をいうと、ボクは犬が苦手なんだ。

会社のマークのせいなのか、大抵、吠えられてばかり。

しかも、いま目の前にいるのは、体つきの大きいボクサー犬。

悲鳴をあげるのも無理ない。

「ウウウ…」

いかにも不機嫌そうに、ボクサー犬は身体を震わせた。

口にはずっとくわえたままの判子。

ボクはコワゴワ、届け物を置いて、判子をもらうとそそくさと玄関から飛び出した。

「あ、ありがとうございましたっ！」

ドアが閉まって、ホッと胸に手を当てると、心臓がバクバクいった。

ドアの向こうから、転げ回るみたいな、若い男の声が聞こえてきた。

なんて、心底、愉快そうな兄妹の会話。
ボクサーの兄に、プードルの妹ってトコかな...。
頭のわるそうな兄妹だな...。
なんて、悔し紛れにボクは思った。

そんなことがあった次の日。
ボクはまた、犬塚さん宅へ行かなくてはならなくなった。
もちろん、届け物で。
昨日の今日だからね。
また吠えられるんじゃないかと思うと、足が重い。
仕事とはいえ、行きたくないね...

ボクは他の届け物を先にして、犬塚さんへは最後に行くことにした。
晴れない気持ちで呼び鈴を押すと、
「はい。どうぞ」
と、聞いたことのない声が返事をした。
ボクはちょっとホッとした。
またパンク・ボクサーだったら、イヤだからね。
「こんにちは～。 運輸です～」
ドアを開けて入ると、宙に浮いた印鑑だけがあった。
そう。そこには人も犬も...

< 「いぬ」 FIN >

いつのころからだろう？
届け先に、犬の家が増えてきた気がする...。
街角でも、飼い主のない犬が、よく散歩しているのを見かけるようになった。
というか、犬を見かけないことなんて、ないみたいだ。
そんなある日。
いつものように台車で配送をしていると、一枚のポスターが目についた。
「よくできたコラだなあ～」
思わず吹き出しちゃったよ。
なんの広告だかわからないけど、犬が背広を着てて、まるで選挙ポスターみたいだった。
「われわれ犬も、税金を払っている市民なのですっ！
清き一票で、世界を変えましょうっ！」
選挙カーのアナウンスが、風にのって聞こえた。
そういえば、この街に住む人間はもう...

< 「いぬ」 FIN >

なんだか信じられないけど。

犬の市長が誕生して、国会議員まで現れてた。
それなのに、テレビの向こう側はひどく平静。
まるでそれが当たり前の世界みたいだ。
というか...。
ボクも会社の人たちも、犬しかいない街に馴れすぎてた。
トンでもない事件のハズなのに、あまり驚いていなかった。
そしてしばらくして。
ボクのバイト先は、移転することになった。
“市民団体”とやらから、抗議がきたらしい。
会社のマークが、街にふさわしくないとかなんとか...。
会社側はそれをすんなり受け入れたそうだ。
業績も悪化してたらしいしね。
犬の街に猫のマークじゃ、それも仕方ない。
ちなみに移転した後は、犬のマークの運送会社が入居するらしいよ。
そんな感じで、街は住人どころか、働く人もいなくなっていった。
もちろん、例外もあるけどね。
警官なんかがそうで、“名誉市民”と呼ばれて、首輪の着用が義務づけられた。
なるほど。そういえばあいつらは、権力の...

< 「いぬ」FIN >